MONSTER HUNTER・謎に包まれた世界

石楠花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＮＳＴＥＲ　ＨＵＮＴＥＲ・謎に包まれた世界

【Ｎコード】
Ｎ７２１３Ｃ

【作者名】
石楠花

【あらすじ】
僕たちは、ただゲームがしたいだけだった。だがそのゲームは何者かによって占領されてしまう。手に汗握るアクション、少しずつ犯人を追い詰める興奮をお楽しみください。あまり上手く書けませんがどうかよろしくお願いします。

第1話　世界結合

「いけー！！気刃切り！！」
おれは「カオス」！ＭＨＰ２愛用者の一人だ！
俺は今、強敵に立ち向かっている・・・！
「フハハハハ・・・おれに勝てるかな・・・？」
「負けるもんか！うぉぉぉぉぉぉぉぉ・・・」

「くらえ！！！！！」
・・・・・・・
「・・・亮太（りょうた）」
おれはビクッとした。
なぜなら俺はＭＨをしている夢を見ていたからだっ・・・
「はい！先生！」
「あとで職員室に来なさい！！」

「あ～ぁ亮太。また呼び出しくらったなｗ」
友達の礼二（れいじ）だ。おなじＭＨＰ２愛好者。
「しかたないだろ。はやくやりたいんだから。」
実は愛好者とは言いつつも、ＭＨＰ２を持っていない。
財布をひっくり返しても塵（ちり）がでるだけのような状態だから買えないのだ。
さっきの「カオス」という名前は今度買った時に付けようと思っていた名前だ。

ちなみに、礼二のキャラは「ディーゴ」という名前だ。
「あんたもちょっとは授業聞きなさいよ。まったく小学生じゃあるまいし。」
こっちも友達の洋子。俺のＭＨＰ２仲間のたった一人の女ハンターだ。
洋子のキャラ名は「アルト」。
「うるさいな～あんな授業聞いてられるほうが不思議だぜ。」
ちなみに俺らは中学１年。
「・・・そういえば、今度ＭＨの続編が出るらしいんだけど、」
礼二がそう言うと、亮太と洋子は耳を傾けた。
「なんと先行体験できるらしいぞ！！」
亮太と洋子はビックリした。亮太は椅子から転げ落ちたほどだ。
さらに礼二は続けた。
「しかも・・・ジャジャーン！！」
そこには
「ＭＨ最新作　先行試遊券　７月７日から」と書かれていた・・・！
なんということだろう！！
ＭＨの最新作を７月７日・・・つまり今日できるなんて！！！
「すげぇぞ礼二！お前天才だぁぁあ～」
「こら亮太！あんまりひっつくな！まだすごい情報あるんだから。」
亮太は礼二に顔を近づけた。
「なんだそれ！」
「落ち着け・・・」礼二は亮太の顔を離した。
「なんと・・・来てくれたみなさまに、ゲームをプレゼント！！！」
その声は教室全体に広まり、あたりがざわめき始めた。
「おい！礼二！すごすぎるじゃねぇか！」
亮太が目をウルウルさせている。礼二は鼻を高くしてこう言った。
「まぁ俺の財力のおかげかな？ハッハッハ！」
「それはあんたのお金じゃないでしょ」
洋子の的確なツッコミに教室は笑いで包まれた。

その日の放課後、３人はドームに向かった。
そこでは、まだかまだか、と
新作ゲームを待ち望んでいる人たちがいた。
・・・まぁほとんど大人だったのだが。

「え～それではみなさまにプレゼントです！！！」
司会者がそう言った瞬間、ドーム全体が
「うぉぉぉぉぉぉ！！」という声を上げながら、奮起していた。
亮太もその一人であった。

３人は早速プレイしてみることにした。
３人の名前はカオス・ディーゴ・アルト。
この３人は主人公となる名前なので、覚えておいて欲しい。
このＭＨはＰＣ用で、各自、家に帰ってやることにした。

亮太は走っていた。
大切に大切にゲームを抱きしめ、駅から家に走っていた。
「ただいま！」
早口で亮太は母に言った。
「あ、あのさ亮太・・・」
母は何か言おうとしたが、
今の亮太には聞く耳持たず、何も聞こえていなかった。
亮太は２階に走り、部屋のドアを閉めた。
「うるさい！亮太！」
隣からかすかに姉の声がする。
・・・亮太には全く聞こえていないのだが。

ゲームを起動した。
始めてみると、中には黒い影が、
「亮太～ご飯よ～」
母の大きな声が聞こえる。
ところがそのとき亮太はここにはいなかった。
亮太のＰＣに写っていた黒い影はいつのまにか、亮太そっくりになっている。
現実の亮太は床に頭を打ち、寝そべっていた・・・

ゲームの世界は非現実的だ。
しかし、こんなことは誰も起こりうるとは思わなかった。
こんなことなんて…

第2話　はじめての友達（前書き）

亮太は友達の礼二と洋子の3人で新しいＭＨのゲームを手に入れるべく、イベントが行われているドームに向かった。
ゲームを手に入れた3人は、各自家でゲームをプレイしてみることに。
ところが、そこで亮太は倒れてしまう…

第2話　はじめての友達

目を開くとそこにあったのは、砂漠だった。
なぜ、こんなところにいるのかはわからない。でも、
じりじりと照りつける太陽のせいで考える暇(ひま)さえなかった。
「熱っ」
いそいで亮太は立ち上がった。

よろよろと歩いていくと、キャンプが見えた。
「よし。あそこで少し休もう…」
亮太の頭の中には休むことしか頭になかった。
だんだんと日陰になってきて…涼しくなってきた…
「おや？」
…遠くから声が聞こえる。
男の…人かな…？
「装備も付けずによく砂漠に…っておい！」
ドサッ…という音が鳴った。
どうやら俺は倒れたらしい。
目の前の男が俺を担いでくれた。
そこから先はあまり覚えていない…

「熱っ！」
ガバッという音とともに亮太は布団を蹴り飛ばし、起き上がった。
「朝から元気がいいな」

たぶんさっきの男だ。小さな木のテーブルに座っている。
「ここはどこなんだ？」
俺はまずそれだけが知りたかった。
だが、男は少し黙っていた。
「…お前もわからないのか…」
亮太はビックリした。
お前…も？
「これは俺の予想だが、ここはＭＨの世界だ。」
亮太は目を見開いた。
少したって、笑いがこみ上げてきた。
「冗談はよしてくれよ！あんたの方こそ大丈夫か？」
男はあきれて
「おいおい。マジだぜ。根拠だってある。」
亮太は聞いてみることにした。
「お前と俺は多分、〇〇ドームのＭＨ新作ゲーム配布特別会場にいたはずだ。」
！！
いきなり核心を突かれた亮太はビックリした。
「…ほらな。俺はそのゲームをプレイしたとたん、この世界に来た。お前も同じはずだ。」
亮太はコクリとうなずいた。
「あと…それだ。」
その男は、壁に飾られている刀を見つけた。
「…骨刀【狼牙】（こっとう【ろうが】）。ＭＨに登場する武器のひとつだ。」
それは骨で作られた長い剣のようなものだった。
青い鱗（うろこ）のようなもので出来た鞘（さや）に収まっている。
「お前でもだいたいわかるだろ。ここがＭＨの世界ってことくらい。」
亮太はまた、コクリとうなずいた。

「そこでなんだが…俺と友達にならねぇか？」
急に持ち出した男の話題にすこしビックリした。
「いきなりこんな変な世界、一人じゃさみしいからな。」
亮太は小さな声で「確かに」と言った。
「俺の名前はラクーン。お前は？」
亮太は少し考えた。
おれは亮太。でも、ここはゲームの中の世界。
おれの名前は…
「カオスだ。よろしく。」
フフンと男は笑った。
「お前ＭＨは初めてか？意地は張らなくていいぞ」
亮太…いや、カオスは答えた。
「はじめてだ。」
男は骨刀【狼牙】を持って、
「じゃぁ、まずは村の紹介からだな。」
二人は男の家を出た。

第3話　村と友と銀世界と…（前書き）

砂漠に飛ばされたカオスはラクーンという男に助けられる。
ラクーンはここはＭＨの世界と断言する。
それを信用したカオスはこの世界で生きるためにラクーンについて行くことにした。

第3話　村と友と銀世界と…

ギィィィ…
音を立てて家からラクーンとカオスが出てきた。
「まずはこの村の紹介だな。ここはポッケ村。ここにはいろんなハンターが集まるからな。」
カオスはあたりを見回した。
そこには一面の雪が積もっていた。いろいろなところで話し声が聞こえる。
俺の話だろうか…
「で、ここが武具屋。モンスターの素材を使って武具を生産・強化できる。」
そこには一人のおじさんと猫がいた。
「あのおじさんは武具の生産・強化をしてくれる。」
おにいさんだ！…という声が聞こえてきた。
「あの猫はアイルーっていうんだ。武具を購入できる。」
おれは軽く手を振ってみた。するとアイルーは大きく手を振ってくれた。
「んで、あそこがアイテム屋だ。あらゆるアイテムを売っているぞ。」
店の前でおばちゃんがいそがしそうにしている。準備中か。
「あそこにいるのが村長。あそこでいろいろな指令を受けるんだ。」
火をたいている。もう年なんだろうか…
「じゃぁとりあえず、ドスギアノスにでも行くか。」
ラクーンは村長の所に向かった。カオスはそれについて行く。
「よっ村長」
「おぅおぅ。そのちっこいのが新しいハンターか？」

村長は笑いながらカオスに向かっていった。
カオスは少し腹が立ったがラクーンが続けた。
「ドスギアノス討伐に行きたいんだが、保護者っつうことで付いていっていいか？」
村長は少し考えてから
「いいぞよ。死なないようにな。」

雪山　エリア６
二人はホットドリンクを飲んで体を温めた。
「いいか。まずは相手の動きを見るんだ。そのあとに隙を見て斬るんだぞ。」
カオスがコクリとうなずくとするどい鳴き声が雪山に響いた。
カオスはドスギアノスと一定の距離をとり、隙を見て相手の首を切り落とした。
「おみごと！一撃とはなかなか太刀ウマイねぇ。」
カオスはラクーンの骨刀【狼牙】を借りていた。
「よし剥ぎ取ってから帰るか。」
ドスギアノスの鱗や皮や爪を袋にいれて、腰に下げた。
２人で雪山を降りようとした。
山頂から声が聞こえる。
…大きい、そして恐ろしい咆哮が…

第４話　悲劇の轟竜（前書き）

ラクーンに太刀を借りて、ドスギアノス討伐に挑んだカオス。
ところが、カオスは一太刀でドスギアノスの首を切り落とし、ドスギアノスとの対峙を終わらせてしまう。
さらっと終わってしまったドスギアノス討伐。
ところが、その時…

第４話　悲劇の轟竜

カオスはドスギアノスを倒して、とても興奮していた。
（おれって才能あるかも…）
カオスはラクーンとともに帰ろうとしていた。
ところがその時、
「グォォォォォォ！！！」
山頂の方で大きな声が鳴り響いた！
興奮していたカオスもこの声にはビックリした。
ラクーンは足を震わせていた。
「うそだろ…」
カオスはラクーンに恐る恐る聞いてみた。
「どうしたんだ…？」
ドシン！
という音とともに竜が降り立った。
その竜は青と黄土色の鱗に強靭な顎。そして爪。
すべてが俺を悟らせた。
やばい…危険だ…！
「ディガレックスだ！はやく逃げるぞ！」
ラクーンが叫ぶと、カオスの手を握り、ティガレックスと呼ばれた竜の反対方向に走り出した。
「どうすんだよ、ラクーン！」
「あいつには勝てない！とにかく逃げろ！」
そういった途端、背後からティガレックスが突進してきた！
「お前は逃げろ！こいつは俺が食い止める…！」
カオスにはもう何も考えられなかった。その場に立ち尽くしていたのだ。

「早く！」ラクーンが叫ぶが、カオスには聞こえない。
ギィヤァァ！！
ティガレックスが叫びながら噛み付こうとする。
ラクーンが太刀で必死に防御する。
「早く逃げろって言ってるだろ！」
やっと我に返ったカオスはその場から逃げ出してしまった…

ハァハァ…
雪山から急いで村に駆け戻った。
もう体力も限界だ。
村に着くと村長にすぐにさっきまでのことを知らせた。
「なんじゃと！…わかった。ギルドに応援を頼もう。」
村の人々が動く。村長も動かしにくい体で必死に駆け回っている。
だが…
俺は動けなかった。
悲しみがこみ上げ、ただ呆然と立っているだけであった…

「どうだ。新米ハンター君。」
後ろに男が立っている。その男はこう言った。
「俺もこのＭＨの世界に来て、ビックリしたよ。これからどうなるんだよ…ってな。

でもな、俺らはこの世界で生き抜くしかないんだ。俺たちにとっての現実(リアル)世界に戻れるまでは…な。」
カオスは振り向きもせず、尋ねた。
「…誰だよ…お前。」
男は答えた。
「ディーゴだ。そして礼二だ。」
カオスはビックリした。
「礼二！？」
ディーゴもビックリしてこう言った。
「よう亮太。やっと会えたぜ。いろんなとこ探したんだからな。それより、お前もう友達できたか？」
ディーゴの言葉にカオスは胸を打たれた。
「さっき…ティガレックスに襲われて…」
ディーゴはため息をついて
「そうか…でも大丈夫さ。きっとな。」
「あぁ…」
カオスは元気なく返事をした。
「…ティガレックスに勝ちたいんだろ？」
ディーゴはそう尋ねてきた。俺は、
「ああ。勝ちたい。仇《かたき》を討ちたい。」
そう言うと、
「じゃぁ今から強くなろうぜ。」
おれはディーゴと握手をした。２人でこれからは行動することになるだろう。
…少しだけ、元気になった。

第5話　突進ＶＳ突進！（前書き）

ドスギアノス討伐に行ったカオスとラクーン。
ところが、その帰り道に凶暴な竜・ティガレックスと遭遇してしまう。
ラクーンが守ってくれたおかげで、カオスは逃げることができたが、ラクーンは雪山に取り残されたままだった。
そこに現れたのが、同級生の礼二。ディーゴだった。
ディーゴはラクーンの仲間になるが…

第5話　突進VS突進！

「ところで、ディーゴ」
そう話し始めたのはカオスだった。
「その後ろのでっかい棒、何だ？」
ディーゴはフフンと言って
「これは俺の得意武器のランスだ！ちなみに名前はアイアンランス！」
カオスは期待した。
ディーゴ…いや礼二はＭＨＰ２カナリやっていたので強いと思ったからだ。
「おぉ！その武器強いのか？」
そう言うとディーゴは
「…そのアイルーから買える武器だ（泣）」
チラッと武具屋を見るとアイルーがピースをしている。
ピースじゃないだろう
…とツッコみたかった。
「しかも、ひどいことに」
ディーゴが続けた話の内容は本当にひどいものだった。
「ＭＨに関しての記憶が一切無い。」
カオスは唖然（あぜん）とした。
「…冗談だろ？お前ＭＨＰ２の時もランス使ってたよな？」
ディーゴは俯（うつむ）いて言った。
「ランスを使っていたことは覚えているんだが、腕が完全にそのことを忘れている。
　つまり、今は俺もお前と同じ初心者だ。」
そんな…と一瞬思ったが、カオスはムッとした。

「なんだと？俺はドスギアノスを太刀を使って、一太刀で倒したんだぞ！」
ディーゴはビックリした。
「な…なに！一太刀だと？やっぱりお前には天性のゲームの才能があったのか…」
カオスは自慢気になったが、ディーゴが言った。
「でも、お前太刀持ってないじゃん。」
！！
そうだった！骨刀【狼牙】はラクーンのものであって、
俺は武器を持っていない！
「…どうしよう」
その時、ふと【ピースサイン】が頭に浮かんだ。
カオスは武具屋のアイルーに向かって走り出し、話し始めた。
「おい！アイルー！骨刀【狼牙】ってのは売ってるか！？」
アイルーは
「売ってないニャ」
と即答した。
「でも他の太刀ならあるニャ」
アイルーがそう言うと倉庫的な箱から、
「これは骨です」と言わんばかりの武器を出してきた。
カオスはその武器を買うことにした。
「この武器の名前は［骨］ニャ！」
そのまんまかよ！
…とツッコもうとしたけど、やめた。
「まぁ取りあえず何か依頼を受けようぜ。」
ディーゴは村長のところへむかった。
じゃぁな～とアイルーに言うとディーゴの後を追った。
…その時のディーゴはラクーンにそっくりだった。
おれもいつかこんな風に…
「ばぁさん！何か依頼は無いか？」

ディーゴは村長に話しかけた。だが、
「ない。残念じゃな。」
期待はすぐに裏切られた。
ちょうどそんな時、旅人が現れたのである。
「お！ちょうどいい。なぁあんたらハンターだろ？」
カオスとディーゴはうなずいた。
「よかった。ちょうど困ってたとこなんだ。
実は最近、俺の住んでる町で食料不足が続いていてな、
食料としてドスファンゴの肉が欲しいんだ。
報酬はガッポリはらうよ。」
カオスは【ガッポリ】という言葉に釣られて、
「やります！それはもう、迅速に！」
と言ってしまった。

ゴクン！
「やっぱりホットドリンクは温まるな～」
カオスは雪山の吹雪の中でこうつぶやいた。
「…お前。さっきまでとはまるで別人だな。」
ディーゴは俺に気を使ってくれたのか、
そんなことを言ってくれた。
「俺は明るいのがとりえなんだ。俺が暗かったらお前も暗いだろ。
せめて俺は明るくなくちゃ…ってな。」
ディーゴは納得した。
こいつは本当は大泣きしたいだろうに…
ブムォォォォ！！
声の主はドスファンゴだった。
巨大な牙に、巨大な体、そしてやけに小さい尻尾。
間違いない。
ドドドドド！！

という音と共に突進してくるドスファンゴをディーゴが盾で受け止めた。
「早くコイツを斬れ！」
カオスはドスファンゴの横に回りこみ、斬りつけた。
だが、ドスファンゴの表皮は硬く、体の表皮を斬りつけるだけとなった。
ドスファンゴの腹から出血する。中学生がこんな物見たら、吐いてしまうだろう。
だが、彼らは動じなかった。
なぜなら、カオスとディーゴの心はすでに、紛れも無い「ハンターの心」だったからだ。
ドスファンゴはカオスとディーゴを振り払い、カオスに向かって突進した。
カオスはあわてて飛び出し何とか逃げ切れた。
「アブね～」
カオスは急いで剣を振ろうとした。
「待て！」
ディーゴの声でカオスの攻撃は止まった。
「こいつは…俺がやる。
　こいつの突進を受け止めてやる…！」
カオスはいそいで止めようとした。
だが、ドスファンゴにもディーゴの声が聞こえていた。
なんと聞こえたかまではわからないが、「挑戦」ということはわかった。
ドスファンゴは雄叫びを上げ突進する。
するとディーゴはランスを片手に持ち、ドスファンゴに突進した。
「無茶だ、ディーゴ！」
ドスファンゴも勝てると思っていた。
しかし、ディーゴの顔をドスファンゴが見た途端、動きが鈍くなった。

ディーゴの目は鋭く、そして赤くなっていた。
この血走った目。本気で狩りをする男の目。
とても中学生とは思えない目だった。
その目はカオスも感じ取っていた。
背筋がゾクッとして、只者ではないオーラがディーゴから出ていた。
周りの視線をお構いなしにディーゴはドスファンゴの眉間にランスを突き刺した。
ドスファンゴは負けを認めたのか、恐れをなしたのか、
そのまま倒れてしまった…

「おぉ！こりゃでかいなぁ！」
旅人は要らなくなったドスファンゴの骨と１００００Ｚをもらった。
「こんなにいいのか？」
カオスは尋ねたが、旅人はただ「ありがとう」といってこの村を去っていった…
「この金をどうする？」
ディーゴが尋ねた。
「お前に全部あげるよ。お前の活躍で勝ったようなもんだからな。」
あと、ディーゴの「すごい目」も見れたことだし…
「そっか！ありがとな！」
ディーゴが笑って返すと
「あ！骨は俺のだからな！」
とカオスが言った。
「おうおう兄ちゃん！いい骨持ってるじゃねぇか！
　その骨ならお前の武器を強化できるぜ！」
そう言ったのは武具屋のおじ…いや、おにいさんだ。
「頼んでもいいか？」
「もちろん！そのために俺はここにいるんだぜ！」
おにいさんが鼻をすすって「へへッ」と言っている。
おれは骨と骨を渡した…？

…わかりにくいな。
つまり「武器の骨」と「アイテムの骨」を渡した。
「じゃあ俺の家、あっちだから。」
ディーゴは自分の家に向かうようだ。
「じゃ。また明日。」
「じゃぁな〜」
ハンターなんてこんなもんか。
カオスはそう思ってしまった。
その次の門も知らずに…

第6話　第1の門・イャンクック狩猟（前書き）

ドスギアノスをランスの突進で倒した、ディーゴとカオス。
ディーゴの赤い目の疑問を残したまま、その日は別れてしまった。
ハンターなんてこんなもんか。
ところが次に待っていたものは…

第6話　第1の門・イャンクック狩猟

「そろそろ頃合(ころあい)かの？」
村長が誰かと話をしている。
「ですね。」
そこに立っているのは長い銀髪の男だった。
「しかし、彼らに腕が無い場合…」
銀髪の男は少し不安気(ふあんげ)に言ったが、
「大丈夫じゃ。やつらならのぉ…」
村長は空を仰(あお)いでそう言った。

……ろ。

…きろ～

おきろって！！
「わっ」
カオスは飛び起きた。
隣にいたのはディーゴだった。
ところが、いつもと感じが違う…
「どうだ！この鎧！ハンターシリーズっていうんだけド。」
そうだ。いままで薄着だったのが、皮の鎧になっている。
皮の鎧といっても、頭と肩は鉄になっている。
「そして…ジャァーン！！」
ディーゴがそう言って取り出したのはもうひとつの鎧だった。
鎖帷子(くさりかたびら)…のようなものでできていて、

背中には3本も剣が刺さっている。
「これはバトルシリーズっていうらしい。着てみろよ。」
カオスは眠い目をこすりながら、バトルシリーズを着た。
「似合ってるじゃねぇか。」
カオスはちょっと照れたが、ひとつ疑問を持った。
「これ、お前が買ってくれたのか？」
ところがディーゴは、
「実は、知らない男からなんだ。朝起きたらさぁ」

コンコン…
「はぁーい」
ガチャ…
「どちら様ですか？」
「おれはシルバスという。
お前らに届け物だ。明日、しっかりな。」

「そう言って、出て行ったんだ。確か長い銀髪だったかな？
でも腑に落ちないところがたくさんあるんだ。」
カオスは言った。
「とりあえず、村長に聞いてみようぜ。
こんな小さな村だ。なんか知ってるだろ。」
ディーゴはため息をついて
「そだな。じゃぁ聞いてみるか。」
カオスは考えていた。
この名前どこかで…？
「ウッ…」

急に頭痛が起こった。

誰ですか？

俺か？やさしいおにいさんさ…

何をしにきたんですか？

おいおい。俺を覚えていないのか？

はい。誰なんですか？

忘れたのかよ。俺はお前の…

…そこから思い出せない。

まぁいいや。今は目の前のことに集中しよう。

「ばあさん。今日の朝にこの服をもらったんだけど
何か知らない？」

ディーゴはすでに村長の所にいた。

俺はいそいで走った。

「送り主の名前は？」

「シルバス…だったかな？」

村長はその名前を聞いて、

「…またか。」と言った。

「え？またか？」

そうディーゴが聞くと

「いやいや。なんでもない。」
と言った。
そのシルバス…にはまたいつか会うな…
と、思った。まぁ会うかどうかはわからないが。
「そうじゃ。お前らに依頼がある。」
カオスは少し疑問に思った。
昨日は全く依頼が無かったのに、なぜ今日になって…
村長は続けた。
「お前らはかなりの天才肌だそうな。
ドスギアノス・ドスファンゴを一瞬のうちに倒してしまったと聞いておるぞ。」
二人は少し照れた。
「そこでだ。お前たちに初心者の門と呼ばれているイャンクックに挑んでもらう。」
!!
初心者の門か…
「お前たちなら多分大丈夫だろう。頼んだぞ。」
そこに現れたのが、武具屋のおじ…おにいさんだ。
「カオス!テメェ武器もなしで戦いに行く気か!」
カオスはハッとした。
鎧が重くなったせいで武器がないことを忘れていたのだ。
「おら!できたぞ!新武器「大骨」だ!」
…ってそのまんまかよ!
と、ツッコむそぶりを見せたが、やめた。
「サンキューな。」
「いやいやいいって。照れるな〜」
「じゃぁ行くか。イャンクック狩猟。」
村長は最後にこう言って俺らを送り出した。
「ちなみに、イャンクックは赤色だからな。大きいからすぐ見つかると思うが。」

そこは雪山ではなく、密林という場所だった。
木々が生い茂っている。
「じゃぁ行くか。」
「おう。」
カオスは尋ねた。
「っていうかどこにいるんだ？」
ディーゴはまたフフンと鼻をならし、
「この装備にはボスモンスターを察知する力があるからな。
俺について来いよ。」
なるほど…防具って便利だな。
そう思ってディーゴの後ろをついていった。

ギャァァ
カオスの耳にはその声が耳に入った。
「ギアノスか！？」
ディーゴは
「いや。あれはギアノスじゃないと思うぞ。
色がかなり濃い。亜種なんじゃないか？」
亜種というのは、同じ種族なのだが、
体色が違い、能力も上がっている。
だがこのモンスターはランポスといって、実はギアノスの方が亜種
なのである。
まぁこれは今後知ることとなる。
「さてと、この奥にイャンクックがいるぞ。」
ディーゴは乗り込んだ！
「おい！待てよ！」

俺は後からついていった。

「ヘーックショイ！」
村長がクシャミをしたようだ。
「う～む。風邪でも引いたかのぅ？」
すると、ギルド員が集会所から出てきた。
「ハァハァ…大変です…そん…長…」
「落ち着け！どうしたというのじゃ！」

ギャァァァ！！
声を上げているのはイャンクックだ。
ところがおかしい。
「イャンクックって赤色って言ってたよな。」
ディーゴは尋ねた。
「でも…どう見ても青…だよな。」
カオスは答えた。

「さきほどのイャンクック、
通常種と思っていたのですが、亜種だったことがわかりました！
！」
「なんじゃと！？」

第7話　赤かろうが青かろうが（前書き）

カオスとディーゴは初心者の門と呼ばれるイャンクックの討伐に向かった。
そこまでは順調だったのだが、
なんとそのイャンクックは通常種よりはるかに強い、亜種だったのだ…！

第7話　赤かろうが青かろうが

イャンクックはこっちを向いて、いきなり突進してきた！
俺たちは
「アブネっ！」
「いきなりかよ！」
と左右にダイヴしてかわした。
「いくぞ！」
とディーゴが叫ぶと、カオスは大骨で、ディーゴはアイアンランスで、
2人とも顔に一撃を加えた。
イャンクックはのけぞって後ろに下がった。
「よし！効いてる！」
とカオスが言ったのもつかの間、イャンクックはすぐに体制を立て直し、俺らに向かってついばみをしてきた！
ついばみはディーゴにクリティカルヒットし、ディーゴは遠くへ転がりこんだ。
「ディーゴ！！」
カオスがディーゴに駆け寄るが、その後を追ってくるように、イャンクックは突進してくる！
カオスはディーゴをアイアンランスとともに抱え別エリアに逃げた。

そこは洞窟だった。
そこにいたのは、草食竜のアプトノスだった。攻撃はほとんどしてこない。
「ここなら安全だろう。」
カオスはディーゴをそこの段差に腰を下ろさせた。

「…なんで。」
ディーゴはしゃべり出した。
「なんで俺のところに駆け寄った！俺はまだ動けた。
俺の方に来たら、隙ができてやられるのがオチだろ！！」
カオスは怒って
「なんだと！俺はお前を心配して…」
「黙れ！俺はまだ動けたって言ってるだろ！」
「お前死ぬところだったんだぞ！」
「俺は自分で回復できた！」
「でも、そこにイャンクックの突進が来ていたらどうする！！」
「！　……」
ディーゴは黙ってしまった。
「…行ってくる。」
カオスが言うとディーゴは心配そうに返した。
「待てよ。1人で行く気か？相手はイャンクックだぞ？
しかも、相手はなぜか亜種。さらに、お前は初心者だ。」
カオスはディーゴに背を向けながら言った。
「相手が赤かろうが青かろうが…仲間の仇は討つ。」
ディーゴは少し待って、立ち上がり、カオスの背中を両手で押した。
「なんだよ！」
「…ほら。俺は元気だ。ピンピンしてる。お前が休ませてくれたおかげで体力も回復した。
1人でなんていうなよ…」
「ディーゴ…」
そうだよな。俺には仲間がいるんだ。
助けて、助けられて、助け合う、背中を預けられる仲間がいるんだ。
「あと、仇って俺死んでねぇぞ！！」
カオスは「あ」と言って、
「悪かったな。じゃぁ行こうか。…2人でな。」

各ギルドハンターに告ぐ！各ギルドハンターに告ぐ！
イャンクック亜種が出現した！いますぐ出れる部隊はすぐに報告にくるように！
繰り返す！各ギルドハンターに告ぐ！…
「やれやれ、あたししかいないの？暇なやつ。」
女はギルドカウンターに行った。
「何？密林のイャンクック亜種討伐？ＯＫ、ＯＫ。軽くやってくるよ。
…ところで、そこに行ったハンターの名前は？」
ギルド受付の人は資料を持ち出して見始めた。
「この２人です。」
「カオス・ディーゴ…って、あいつらかよ。
あっの馬鹿２人はなんで青クックなんかに手こずるのかねぇ。」

クックのいるエリアに行くと、
「待っていたぞ」といわんばかりに威嚇してきた。
クックはまたまた、突進してきた。
ディーゴはランスの盾で突進を食い止めた。
カオスは太刀で防御できないので、回避する。
その後、尻尾を一斬りする。
「グギャァァ！」というクックの叫び声が上がった。
ディーゴはクックの股下に潜り込み、ランスで腹を突き刺した。
またもやクックは叫び、後ろに飛び下がった。
その時、旅中の２人の会話を思いだした。

「イャンクックか…どんなやつなんだろうな。」
「実はちょっとだけど、調べてあるんだ。」
「ほぅ！さすが、ディーゴ。」
「やつの耳はとてもでかいらしい。だから、音に敏感なんだ。」
「へぇ～」

それを思い出したカオスは、
「ディーゴ！耳ふさげ！」
と叫んだ。
「はぁ！？」
とディーゴが返した途端、
「ワーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
とカオスが叫びをあげた。
ディーゴはその行動にビックリしたが、
一番ビックリしていたのはイャンクックだった。
「全く、すげぇことしやがるぜ」
ディーゴはそんなことを言いながら、イャンクックの頭を何度も突き刺した。
ところが、イャンクックはそれで怒って、尻尾を振り回した。
「ぐわ！」
「いってぇ！！」
2人は洞窟の壁に叩きつけられた。
イャンクックが叫び声を上げ、カオスに攻撃しようとしたその瞬間。
「待ちなさい！そこの青クック！！」
さっきのカオス並の声を上げて一人の女が入ってきた。
その女は赤くちょっとトゲトゲした鎧を全身にきていて、片手にはハンマーがあった。
そのハンマーはなんとなくこのクックの頭に似ていた。
クックはまた、大きい音を出されたことに腹を立て、女に向かって

突進をした！
「危ない！」
カオスが叫んだその瞬間、
女はジャンプしてかわしたあと、クックの頭を右から左にたたきつけた。
その一撃でクックの耳は潰れて、ボロボロになってしまった。
「あんたたち、なに馬鹿してんの？」
なんだこの女。助けてもらったのはいいが、
初対面でこの態度…
と思った瞬間だった。
「…洋子！！」
そう叫んだのはディーゴだった。
「そう。私は洋子。でもいまは、ギルド公認・ハンマーハンター・アルトよ。」

第8話　実力差（前書き）

イャンクックを討伐に行くカオスとディーゴだったが、そのイャンクックは亜種だった。
2人はそのクックに悪戦苦闘する。
2人がピンチに陥ったとき、現れたのは、
友達の洋子…アルトだった。

第8話　実力差

「なにボサっとしてんの？はやくこいつかたずけよっ！」
アルトは単身でクックに突っ込んでいった。
俺らは後からついていくような形で戦いに挑んだ。
イャンクックはかなり怒っている。いまはカナリ危険だ。
ところが、アルトはクックの攻撃をヒラリヒラリと避けていく。
俺らは避けるので精一杯だが、（しかも反撃をくらったりもする。）
アルトは確実に頭や足などにハンマーを叩き込んでいる。
「グェェェ…」
イャンクックは頭に5発目の攻撃を食らったと同時に地面に倒れこんだ。
アルトはそのままクックの頭を攻撃を何度も何度も叩きつける。
俺たちは足に攻撃を与えていく。
ついにクックを黙らせたときには俺たちはボロボロだった。
まぁアルトはほぼ傷一つできていなかったが…

「あんたたち、何でそんなに弱いの？ビックリするわ。」
アルトは自分は立ったまま二人を座らせ、説教をしているかのごとく、話をしてきた。
「だって、俺始めたばっかりだし…」
カオスはこう言った。アルトもあんたは仕方ないわね。という顔をしていた。
「俺はだな…」
ディーゴがそう言おうとすると、アルトは、眉間にしわを寄せ、

「あんたは熟練ハンターでしょうが…！こっちに来て全部忘れたからって、
取り戻せない訳無いでしょ。」
といい放った。少しディーゴはションボリしているようだ…
「ていうか、あんたたちって「ギルド」には入ってないの？」
2人は聞いた。
「ギルド？」「ギルド？」
アルトはがっくりして、
「あんたたち何も知らないのね。いい？ギルドって言うのは、
クエストを発注している機関なの。
で、そこに加盟していると、毎日依頼が届いて、やってるうちに
腕を思い出すわよ。」
ほぉ～と2人はつぶやいた。
「まぁとりあえず、村に帰ったらギルドに加盟してみることね。
というか、村長からその話を聞くと思ったんだけど…」
「そうなのか？聞いてないが…」
ディーゴはおかしいな…という顔をしていた。

一体どうなっているのだろう？

ゲームの中に入ってしまう。

記憶を無くす。

身分不明の関係者。たしかシルバス。

そして、ギルドを俺たちだけに隠そうとする、村長…

「おぉ！クック討伐ご苦労じゃった。」
ディーゴは怒りながら
「ご苦労じゃない！クックに会ってみたら亜種だし、
しかも、なんでギルドのことを話してくれなかったんだ？」
村長は少し考えて、
「あぁ！！すっかり忘れておった。
すまない、すまない。」
ディーゴは呆れ顔になって、
「もう…しっかり頼むぜ…」
といった。
「そうだ。お前さぁ、ギルドに加盟申し込みしてきてくれよ。」
ディーゴの急なお願いに少しカオスは戸惑った。
「へ？俺1人だけ？2人でいこうよ～」
カオスはダダをこねたが、
「頼む、用事があるんだ。」
と言って俺を集会所の方に行かせた。

そこは、村の端。
ポッケ農場というところだ。
村の関係者が管理している農場で、いろいろな素材が取れる。
そこにいたのはディーゴとアルトの姿だった。
2人はつり橋に並んで腰掛けていた。
「…心配してたんだからな。」
ディーゴは少し照れながら、アルトに話しかけた。
「…馬鹿。」
アルトは少しディーゴにもたれかかった。
「なぁアルト。」
ディーゴはアルトの顔を見て言った。

「何？」
アルトはディーゴの顔を見返す。
「これからは…」
「お～～い！ギルド加盟手続きって本人いないとダメなんだって！！」
2人はビックリした。それはそうだ。
いきなりカオスの馬鹿でかい声が聞こえたら、誰もがビックリする。
「おう！わかった！」
ディーゴは大声で返事すると、
「ごめん。また今度…な。」
そういってその場を立ち去った。
「…いいとこだったのに。」

「はい。ギルド登録完了です。」
2人は集会所でギルド登録を済ませていた。
「じゃぁ今日はこの辺で。」
ディーゴは帰ろうとしたが、カオスは呼び止めた。
「えぇ～もっと狩りしようよぉ～」
ディーゴは「カーー！」と言って、
「俺は青クックと戦って疲れたの！お前はどこから力が出てくるんだ！」
と言い放って集会所を出て行った。
「なんだ。つまんね～」
どうしようか悩んでいたところに、ギルドカウンター受付の人が話しかけてきた。
「今ならちょうどクエストがありますが。」
カオスは喜んで、
「おぉ！すばらしい！どんなクエストですか？」

受付の人は資料を取り出して、
「…カンタロス５０匹の討伐クエストです。」
カオスは少し戸惑った。
…カンタロスってなんだ？
「あ。カンタロスは虫ですよ。雑草で見えにくいですが。」
カオスはピンと来て、
「よし！そのクエスト行きます！一人で！」
そうして、単体でカンタロス５０匹の討伐に出動した。

第8話　実力差（後書き）

アルトの装備は全身クックにクックジョーです。
…クックやりすぎかな^^；

第9話　徳川3代目（前書き）

イャンクック亜種を助っ人・アルトと共に倒した、カオスとディーゴ。
アルトとディーゴの複雑な関係（？）に全く気付かないカオスは、
元気が有り余っていたのか、
すぐに次のクエストに向かった。

第9話　徳川3代目

「はぁ！」
カオスは密林にいた。
アプトノスを切っていたのである。
アプトノスは
「グォォォォ…」
という声を上げながら、倒れていった。
カオスはその肉を剥ぎ取り、肉焼きセットを取り出した。
タンタラン♪　タタラ♪　タンタラン♪　タタラ♪
タララン♪　タララン♪　タララン♪　タララン♪
タタタタタン♪♪…

…コゲてしまった。
まぁいいや、食べよう。
「…グヘッ」
やっぱり俺にはこの味は無理なようだ…
「さてと…エリア2にカンタロスがいるはずだ。」
前話を読んでいただいた方はわかるとおもうが、
カオスはカンタロス討伐クエストに来ている。
エリア2に行ってみたが、カンタロスの姿が見あたらない。
「あれ？どこに…ってうぉ！？」
カンタロス…実はそんなに大きくはない。
草むらに隠れて見えなかったのだろう。カオスは顎に不意打ちをくらった。
「テメェ！」
カオスは自慢の武器…大骨を振り回してカンタロスを真っ二つにした。

カオスは少し唖然とした。
なんだ、こんなもんなんだな…と思った。
ところが、倒したカンタロスはまだ1匹だ。
あと49匹も狩らなければならないのを忘れてはいけない。
…だが、カオスはすっかり忘れていた。…ダメじゃん。
そのエリアで10匹をちゃっちゃとかたづけたあと、エリア3に向かった。
「助けてにゃー」
聞こえたのはアイルーの声だった。
移動してみると、コンガ3頭に囲まれている。
…ヤンキーがカツアゲしているみたいだ。
カオスはコンガ3頭をバッサバッサと切り倒した。
そこに居たアイルーは良く見ると赤色だった。
「助けてくれたのかニャ？」
コンガを飛び越して俺に飛びついてきた。
「ああ。大丈夫か？」
そう言うと、アイルーの目が潤み始め、ついには泣き出してしまった。
「な…なんだよ！？」
「実は一人身だったのだニャ。
町に繰り出したはいいものの、雇われず、泥棒扱いにまでされ、
おまけに、家に帰ろうともどっちかわからない始末。
私は町を出て、この密林に来てみたんですニャ。ところが…」
とえんえんと長ったらしい愚痴を涙ぐみながら鼻声で言われたカオスは、
大体の雰囲気をつかめたので、アイルーにこう言った。
「まぁ…とりあえず、頼るところ無いなら家に来いよ。」
アイルーの涙はさらに増えていき、
「ありがとうございますニャ。私は赤虎のイエミツですニャ！」
イエミツはコチラに向かって敬礼をした。

「そうだ！早く帰るためにも、クエスト終わらないと。」
そう言うと、イエミツは
「カンタロスの居場所なら知ってるニャ！」
「本当か！？連れて行ってくれ！」

こうして２人…じゃない１人と１匹は行動を共にして、
ついに１時間。カンタロス５０匹の討伐に成功した。
ゲームではクエストは５０分で終わらなければいけないが、
その辺はツッコまないでおいて欲しい。

村に戻ると、まずは武具屋に行った。
「武具屋のおっさ…いや、おにいさん！強化お願いしていいかな？」
武具屋のおっさ…じゃない、おにいさんは店の中からでてきて、
「おお！いいぞ！武器か？」
「そろそろ大骨卒業と行きたいのでね。」
「カンタロスの素材はあるか？それならいい武器が作れるぜ！」
なんと都合のいいことだろう。カンタロスはさっき狩ったばっかりだ。
…まぁこの辺は作者の陰謀ということで。
「頼むぜ！おっさ…おにいさん！」
おうよ！という声が聞こえる。やっぱり頼もしいな。おっさ…いや、おにいさんは。

「うめぇ！」
家に帰ったカオスはイエミツの料理を堪能していた。
「丹精こめて作ったニャ。うまいに決まってるニャ！」
カオスは喜んで、
「こんなうまい料理がこれからは毎日食えるのか…楽しみだなぁ！」
そう言うと、イエミツは照れて、
「はいニャ！毎日がんばるニャ！」

そう言った時だった。
「…母さんの料理もコレぐらい上手かったかな…」
カオスは思い出していた。
いくらハンターになったとは言え、人間は人間。
元の世界に返りたくもなる。
「ご主人…」
「おい！大変なことになってるぞ！！」
そこに入ってきたのは武具屋のおっさ…あぁ！面倒くさい！おっさんが入ってきた！
「どうしたニャ！？」
イエミツが答えるとおっさんは、
「とにかく外に出てみろ！」

この村の中心には掲示板がある。
いろいろな情報が載っているのだ。
だが、その掲示板の跡形も無く、あったのは

…黒い小さなブラックホールのような渦だった。

第9話　徳川3代目（後書き）

ネタが不足しております；；；
ちょっとＭＨネタは休むかもしれません。
その代わり新しいネタをこさえておりますので、
そちらをご期待ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7213c/

MONSTER HUNTER・謎に包まれた世界

2010年10月17日03時06分発行